

## 乳児の育児における「大変さ」とは

宮原 優

### はじめに

出産前、私は定期的に母親学級に通っていた。そのなかで、頻繁に「赤ちゃんの育児は本当に大変なので」という言葉が繰り返された。たとえば、「赤ちゃんのお世話が大変だからしばらく歯医者に行くことはできない。だから…」とか「あまりの大変さに赤ちゃんを可愛く感じたり、しばらくしてそんな風に思った自分を責めてしまったりするでしょうが…」など様々である。そのとき、すでに3人子供のいる妊婦さんが、「またあの大変な状況になるのか」とつぶやいた。なかなか眠る時間が確保できないのだろうということ、おむつ替えや授乳などの物理的負担の大きさは容易に想像できるように思えたが、ほかには何がどう大変なのかなかなか想像がつかなかった。その人と、「大変だから」と言った助産師さんに「具体的に何が大変なの?」、「何が一番大変だった?」と尋ねた。二人とも考えこみ、助産師さんは「何がというよりも」と言葉を詰まらせ、その妊婦さんは「忘れちゃったなあ…」と首を傾げた。

産後一年が「大変だったな」と振り返りつつ、何が大変だったか忘れてしまった、あるいはわからないという親は多くいる。忘却され、言葉のあてがわれていないその育児の「大変さ」とはいかなるものであろうか。自分自身の経験をもとに、何がこの「大変さ」を構築してしまっているのかを考えたい。

現状の日本において、とりわけ長時間大人と一緒に過ごさなくてはならない乳児の場合、子育てはもっぱら「親」によってなされている。出産の高齢化や核家族化、子育て世代の都市近郊への移住の傾向によって、赤ちゃんの祖父母に助けてもらうことは困難になりつつある。さらに、産休や育休の取得の困難さに加え、労働の長時間化によって、いわゆる「母親」が育児の中心とならざるを得ない場合が多い。そうした意味では、生後一年の育児の大変さを考えることは、産後一年の「母親の役割」の大変さを考えることであるとも言い換えられる。ここでは、いわゆる「母親という役割」を、そうした「育児の中心を担う役割」として考えたい。現状、「母である」ことは特定の身体に切り詰められ（あるいは特定の身体が「母である」ことに切り詰められ）、かつ「母であること」に過剰な意味が付与されている（江原 1991）。またこうした意味付与は正当なものではなく、家父長制という社会の権力装置の成立とその維持に組み込まれている（チョドロウ 1981）。この研究ではそうした「母という役割」の社会における成り立ちには踏み込まず、「母という役割」のもとにどのようなことが経験されてしまっているのか、その一端を垣間見ることが目的とする。当然ながら、「母親という役割」は自然的所与ではない。「母親という役割」は社会的に構築されたものであり、社会の特定のメンバーが担わざるを得ず、そうでないものは担うことが困

難にされている。「母親の役割」において何が経験されているのだろうか。その大変さとは何なのだろうか。

とはいえ、「母親の役割」「乳児の育児」と一口に言ってもかなり漠然としてしまう。この研究では、乳児の育児の大変さとはなにかを考えるにあたって、乳児の無力さが「母親」にどう経験されるのか、に焦点を絞りたい。

## 1. 社会的リズムと乳児の時間

まず、乳児が社会的リズムを習得していない、また習得する機能も備えていないという無力さについて考えてみよう。乳児というものがどういうものなのかわからないまま生活が始まったとき、戸惑い、困惑したのは乳児のリズムと社会的なリズムとを両立させる困難さであった。赤んぼうには、昼も夜もない。朝は「起きる時間」というわけではないし、一日の始まりというわけでもない。どこで一日が終わるのかもわからず、夜も眠る時間というわけではない。そもそも赤ん坊には一日の始まりも終わりもないように思われた。また、いつおなかがすくのか、どれくらいおなかが空くのか、いつ眠るのか、どれくらい眠るのかまったく予測できず、決まってもいなかった。繰り返す朝、昼、夜という安定した周期性、それに伴う食事や睡眠、活動時間のリズムは決して自然に与えられているものではなく、おそらく生まれてから何年もかけて習得していくのだろう。また、赤ん坊のリズムが極めて不安定であるのは、まだリズムを習得していないということのほか、目に見える形であれ目に見えない形であれ、驚くようなスピードで体が成長し、発達するためでもあるだろう。

一方、大人は社会において共有されたリズムを習得し、それを基盤に生活している。それまでの私の生活リズムも決して規範的ではなかったが、どの時間帯で人が活動し始めるのか、どの時間帯で静かになり、おだやかにくつろぎの時間になるのか、前提されていた。時計やカレンダーは、一般的には時間を計るものであるとされているが、その第一の役割は「社会における共通の目安」であることだろう。つまりそれはみんなの約束、反復のリズムや現在における過去と未来とのつながり方の制度として機能しているのだ。しかしながらそれが「文化によって共有されているリズム」であることが忘れられてしまうくらいに、私たちに染み込み、前提されている。

私たちはこの、制度としてのリズムを利用したり、あるいはそれに追い立てられるように感じたりしながら行動に段取りをつけ、大小の目的を達成していく。ひょっとしたら、このリズムに即して目的や願望が形成されていくのかもしれない。「10時から見たいテレビ番組があるからそれまでに夕飯と入浴を済ませ、ドライヤーもかけておこう。とすると、もうそろそろ夕飯の支度したほうがいいかな」とか、「去年の冬の光熱費の出費はひどかった。今年はあるべく一つの部屋で過ごそう」などだ。このように私たちは自分の願望や目的の実現のために、社会的なリズム、反復と連なり方の制度に即して自分の計画を立てたり、行動したり、過去によって支えられたり、動機づけられたり、近い将来を見越して期待したりそこ

からエネルギーを先取りしたりしながら生きている。

現状、乳児の育児は、この「社会のリズム」と不安定な乳児のリズムの両方を同時に生きることが意味している<sup>1</sup>。乳児に寄り添い、不規則で不安定なそのリズムにつきあわなければ育児できないし、また社会のリズムから全く離れて育児することも不可能である。不自由なく買い物できる時間帯、役所で手続きができる時間帯、安心して散歩ができる時間帯、洗濯機をまわしたり掃除機をかけられる時間など最低限の社会のリズムを生きなければ育児できない。これらのリズムを両立させることは、必然的に、段取り付けた行為の中断、段取り直し、行為の再開を余儀なくさせる。決められた約束を守ること、そのための計画を立てること、その実現に向けて行動すること、私たちはおそらく幼いころからこれらの重要性を言い聞かせられ、あるいは身に染み込ませ、実際にこのように行動していく能力を少しずつ身に着けてきた。しかし、繰り返される中断、再開、やり直しに、重要であると思っていたはずの「目的」と「その実現のプロセス」はほとんど無効化されていく。この無効化は、私の行動のプロセスが弱体化して、私の行動の能力の弱体化をもたらすだけではない。それは、私に未来や過去を見えづらくさせ、私を宙ぶらりんの「今」に閉じ込めかねない。

どういうことか。私のある「今」は、それ自体完結して成立しているわけではなく、過去と未来への関係として成り立っている。「今」は、現に在るもの、見えるものだけでなり立っているわけではなく、過去という「もうないもの」「かつてはあったもの」に支えられている。また過去において培われた能力によって私たちは未来という「まだないもの」「これから到来するもの」をある程度予測し信頼し、期待や不安を伴いつつそこに向かい、あるいは受け入れる姿勢をとろうとしている。社会的なリズムや反復と連なり方の制度としての時間は、そうした「過去と未来へのつながり」をより容易にさせ、秩序立てている。しかし、極めて不安定で予測のつかない乳児のリズムに寄り添っていると、「これまで」は全く通用せず、「これまで」とのつながりは揺らぐ。さらに、乳児の「これから」はほんの少し先も身構えようもない、ただただわからないものになっていく。すなわち、「今」は過去や未来とつながりづらくなっていく。

生後10か月くらいのときだったか、眠らずぐずる子どもを抱いて、暗いうちからずいぶん長いあいだ歩き回り、早朝、コンビニで自分の朝ご飯を買ったことがある。レジの人が私を見て言った。「あらあら、大変！ずっと歩いてたの？」はいと答えるとその人はあたたかく続けた。「まだ歩かないんでしょう？大丈夫よ、歩いて自分で動き回れるようになったらね、疲れて勝手に寝てくれるようになるから。ちゃんと寝てくれるようになるから大丈夫」。これを聞いて私はほっとして、その人のまなざしに胸がいっぱいになったあと、とても驚いた。私には足元の「今」が精いっぱい、「これから」「いつか」がまったく見えていなかったことに気が付いたのだ。

---

<sup>1</sup> 中村佑子は著書、マザリングの中で、こどもの時間はその都度その都度生成する、蓄積されない「神話的時間」であると記述し、一方で大人の時間は、段取りつけて進行していく「目的的な時間」であると記している。中村(2020:46)

「これまで」を知らず、「これから」を全く気かけずただただ「今」喜び楽しんでいる乳児は、ときに私を「目的」や「段取り」から解放して、「今」の豊かさにすっぱり浸してくれる。「今はこうしていいかな」と、自分の予定や段取りから一度離れ、「今」を楽しめるときもある<sup>2</sup>。しかしその一方で、乳児に寄り添う私には「これまで」も「これから」も見えづらくなって、終わらない「今」にいわば閉じ込められてしまうこともある。「今」の重みが「これまで」によって支えられず、「これから」に逃すこともできず、耐えきれないほどになってしまう場合もあるだろう。

社会的リズムと乳児のリズムの両立は、乳児の育児の「大変さ」に含まれるだろう。その大変さを考察していくと、私の行動能力の弱体化、そして未来や過去と結びつきづらくなっていき、「今」に閉ざされかねない私の在り方が確認できる。おそらく乳児とともに過ごすうち、乳児も私もお互いにやがてリズムを調和させていけるようになり、私の行動能力も再編されていく。これに伴って、「これまで」に支えられたり、「これから」の楽しみにエネルギーをもらったりすることもより容易になっていくのだろう。

次に、乳児に寄り添うとはどういうことかを考えてみよう。

## 2. 寄り添い、探りゆくこと

生後すぐの乳児がほとんど何もできないということは周知の事実である。乳児は行動できないだけでなく、体温を調整する機能も未発達だし、消化機能も、視覚機能も未発達である。「暑いから」「寒いから」と布団をかけたりそこから出たりすることもできないし、当然自分で食事をとることもできない。乳児が生きるためには他者による全的なケアを必要とする。不快を覚えた場合には、乳児は泣くものだと思われるが、個体差が大きく一概には言えないものの、おむつが汚れていても泣かないときは多々あるし（むしろ気持ちよさそうにしているときもある）、お腹がすいても泣かないときもある。泣かないからと言って放っておくと、乳児はもの数時間で低血糖や脱水に陥ってしまうし、おむつのなかの排泄物によってあつという間におしりがかぶれ、ひどくするとただれてしまう。だから周りの大人がタイミングをはかり、絶えず様子をさぐりながらケアしていくしかない。乳児の発達において十分なケアが必要とされ、それが単に生命の維持のみならずその後の成長や社会生活においても重要な要素であることはよく知られている<sup>3</sup>。自分が大切にされているという

<sup>2</sup> 早川はノディングスの「受容性」の概念とスロートの観点から出発して、非常に興味深い考察をおこなっている。私たちは多くの場合、物事に段取りをつけて自分の願望を達成していく目的達成を目指し、未来志向型の自己実現を目指している。しかしそうした時間の過ごし方は未来によって縛られてしまっている在り方だともいえる。その一方で未来や目的に縛られることのない「現在の享受」という在り方も経験されうる。それは目的が現在に先立つ自己実現型の自由とは異なる自由であると早川は指摘している（早川 2021）。

<sup>3</sup> ボウルビイによって提唱されたアタッチメント理論がこうした発達心理学の見解を支えていることは広く知られている。その一方ボウルビイは乳児と母親との結びつきのみを焦点を絞ったために、乳児の育児が「母親の役割」であり、母親にしか担えないかのような認識を強くもたらしたことも事実であろう。

感覚、見放されたりはしないという感覚は、育まれる必要のある感覚なのだ。

昼夜を問わないそうしたケアが、寝不足や多くの労働を伴い、親の身体に対して大きな負担となることは容易に想像できるだろう。しかしここで注目したいのは、乳児が意思表示やコミュニケーションの規範的所作をもっていないという点である。当然ながら乳児は言語をもたず、大人がすぐに理解できるような意志表現の動作も携えていない。生まれて間もなくは声というより音のようなものしか発さず、自分のこぶしを口に入れることもままならない。そんな乳児のケアとは、どのように可能なのだろうか。

まず、大人の場合にはどのようにコミュニケーションが果たされているのかを考えてみよう。私たちは他者と自分とを重ね、いわば他者のまなざしや生に滑り込み、入り込みながら生きている。「他者」というと「理解しがたいもの」「近づきえないもの」と思い込んでい現代人にとっては、少々奇異に聞こえてしまうかもしれない。しかし、他者に入り込み、滑り込み、自分と他者とが重なるよう調節するこの能力は、それと気づかれないまま私たちの生活を支えている重要な能力である。私たちは、映画を観て泣いたり笑ったりする。それは私たちが登場人物を理解したり登場人物に合一したりするからではなく、登場人物に入り込み、その目線を生きてしまうからこそ可能なのである。また、私たちはスポーツやダンスを観て楽しむことができる。それは私たちがアスリートやダンサーの動きを理解したためではないし、あるいはそれらの動きを自分の身体によって再現できるように習得したためでもない。見る人がアスリートやダンサーの身体やその運動に引き込まれ、引き込まれること自体に喜びを感じるからだ。もっと身近な他者とのやり取りさえ、他者と自分とを重ね、他者に入り込むこの能力に支えられている。たとえば「欲しいの?」「え!くれるの?」といったシンプルなやり取りが成立するとき、私たちがすでにお互いに相手の意思や欲望を生きてしまっていることがわかるだろう。

メルロ＝ポンティによれば、こうした私と他者との重ね合わせ、他者への入り込みは、言語や社会的な所作、身振りによって容易に果たされ、私たちのコミュニケーションを動機づけているという。彼はその経験を細やかに分析している(メルロ＝ポンティ 1974: 207-237)。しかしながら乳児はこうした身振りや言語を全く習得しておらず、さらにはほかの動物と比べても極度に未発達なまま生まれてくる<sup>4</sup>。では、言語や社会的な身振りを身に着けていない乳児の場合、どのようにケアが果たされうるのだろうか。規範的動作や所作の欠如は何によって埋められるのだろうか。

ここで一つの具体例を見てみよう。産後、退院する際に助産師さんが次のように話してくれた。

「退院すると、赤ちゃんがどれくらい母乳を飲んでいるのかわからなくて不安だと思う。新生児用の体重計を買ってしまうお母さんもいるのだけど、授乳のたびにそんなことしていたら参ってしまうから、表情とか、便やおしっこの量とか、機嫌がよさそうとか、そう

---

<sup>4</sup> 酒井はメルロ＝ポンティの講義録を分析しつつ、運動や知覚能力が端的に未発達である乳児は、むしろ「様々な規範をこれから身に着けられうる」状態であることを意味すると指摘している(酒井 2019)。

いうことで判断してね。」

哺乳瓶での授乳の場合は当然飲んだ量を計量することができる。しかしながら、母乳の場合は乳児が飲めているのか、また母乳がちゃんと出ているのか、どれくらい飲んだのか、特に最初のうちは全くわからない。とはいえ家庭で授乳のたびに計測するわけにはいかないので、大人が感覚を駆使して乳児を探る必要がある。大人同士の場合には、ある程度共有された所作や動作、たとえば不満げな所作や感謝の表情などによって私たちはすんなりと相手にひきこまれ、滑り込み、さらにそうした所作に対してふさわしくふるまうことができる。ところが乳児の場合、それこそ尿や便の量や、抱き上げたときのくっつきと体をこちらに寄せようとするかそうでないかの感覚、手足の力の入り具合など、あらゆる感覚を投じて乳児の感じているもの、乳児の生きている世界に入り込もうとする必要がある。また何かの欠乏状態が明らかであったとしても、何が求められているのかは手探りで求めなければいけないので消耗も大きい。手探し続けても結局何も手ごたえがないこともある。こうして乳児の場合、大人同士のコミュニケーションより、こなさなくてはならないフェーズ、負担の大きいフェーズが一つ増えることがわかるだろう<sup>5</sup>。すなわち、感覚を駆使して乳児を探り、ここに入り込もうとしなくてはならないというフェーズである。

感覚すること、あるいは知覚しようとすることについてもう少し考えてみよう。感覚することは、自分の身体を通じて自分でないものを探っていく探求の運動として成立している。いわば自分を媒介にして自分でないものを探り、それを自分に対して出現させているのである。一方で、人は自分を感じ、知覚することもできる。ただし、それは自分でないものを媒介にして初めて可能である。メルロ＝ポンティは感覚することと感覚されるものの互いを媒介にするこの関係を、背景と図の関係、あるいは表裏関係として記述する。私がテーブルの肌理を感じる時、自分の手を通じてそのざらつきや滑らかさを感じる。このとき私の手のひらはテーブルの媒介であって感覚対象とはなっておらず、いわば私にとって透明である。一方、私は自分自身の手のひらを感じることもできるが、それは自分でないもの、テーブルを媒介にして感じられる。私はテーブルを通じて自分を感じるのであり、テーブルは手のひらの背景として成立している。私は自分の身体を通じて自分でないものを感じ、また私でないものを通じて自分自身を感じることもできる。私と私が感覚しつつあるものとは、互いに互いの背景となることによってお互いを出現させているのである。

こうして、感じるということ、感覚をもって探っていくことは、いわば相手に寄り添っていくなか、そこから私と私でないものが形を帯びていく過程である。だから、感覚しようとすることは、あらかじめそれぞれ完結して閉ざされてある「私」が「私でないもの」を探

<sup>5</sup> ホックシールドは「感情労働」という概念を示し、労働に関する理解を大きく深めた。「感情労働」とは、相手の特定の感情、主に快や快適さを導くために自分自身の感情を抑制したり、コントロールするよう求められる労働である。ホックシールドは、育児もまた感情労働であること、むしろ育児こそが感情労働の原型であり、そのためにいわゆる「女性」にそうした感情労働が押し付けられがちであることを強調する。現象学の観点から乳児の育児を考察した場合、私たちはこの概念に新たな様相を付け加えることができるだろう。つまり相手に「入り込もうと努める」消耗、相手が何を感じているのかを感じようと手探しする消耗である（ホックシールド 2000）。

ることではない。まず感じようとする結びつきがあって、そこから私と私でないものがたちあられるのだ。記憶が定かではないのだが、おそらく20年以上前に、新聞でいわゆる「育児ノイローゼ」についての記事を読んだことがある。「自分にとってはこのお風呂の温度は気持ちよいけれど、この子には熱いかもしれないぬるいかもしれない。そういうふうに、自分には良いけれど、この子にはどうなのかなと考え始めると何もできなくなってしまう」という母親の話であった。この母親はなぜか乳児に適度に入り込むこと、感覚によってうまく探ること、自分と乳児とをうまく重ねることができないでいるのだろう。疲れすぎているのかもしれないし、赤ん坊を感じるというよりはお風呂の温度ばかりを感じようとしてしまうのかもしれない。いずれにせよ、この母親は「この子」と「私」をそれぞれ閉じた「個」として考えてしまい、その結果赤ん坊のことが「わからず」、「何もできなくなってしまう」のだろう。「わかる」ことはあるものから別のものを分かつことに始まる。分かつためにはあるものと別のものとが密着し、境界をともにし、重なりあっている状態が必要とされる。だから、それぞれ閉じて完結してある二つの隔てられたもの同士において「わかる」ことは成立しない。この母親のようにそれぞれがすでに分かつたところから出発すると、確かに何もわからず、できなくなってしまうのかもしれない。

大人同士の場合は感じ取ること、相手と自分を重ねることを当たり前のように果たしうる。規範的所作はそのように相手と自分とが重なり、互いに入り込むことを容易にするものであり、相手に自分のことを感じられやすくするための所作なのである。乳児の場合、ニーズを汲み取りそれに応じるために、探りながら乳児の生に入り込むよう努める必要があることがわかる。このようにメルロ＝ポンティの描出した「感覚すること」「感覚によって探っていくこと」の原理に即して乳児の育児について考えると、「母親という役割」において経験されているものをさらに考えることができる。

先に見たように、感覚することは私自身の身体を媒介にして私でないものを私に出現させることである。そして私が私を感じることは、また私でないものを通じてしかできない。注目すべきは、感覚することは私に対して私を出現させ、また私でないものを出現させるが、私に対して出現するのは「私」か「私が感覚しようとしているもの」のいずれか一方のみであるということ、どちらかは背景として後退してしまうということである。冒頭にも述べたように、現状乳児の育児はもっぱら母親の役割とされている。そして多くの場合、母親は一人で長時間乳児を世話し続け、感覚を駆使して乳児を探る。これはまた、長時間「私」を乳児の背景へと押しやることを意味する。

寒い時期、赤ん坊を一人でお風呂に入れるとき、何から何まで気を使ったが、古い木造住宅の我が家で一番気を使ったのは、風呂上がりだった。赤ん坊がじゅうぶん温まったと思ったら、バスタオルで素早くくるんだあと、自分は足だけバスマットで拭い、びしょびしょの体のままバスローブだけ羽織る。自分の体表が急速に冷えていくのを感じ、小さな小さな赤ん坊の体があつという間に冷えてしまうのではないかと大急ぎで暖房の効いた部屋まで抱いていく。湯冷めしないよう暖かい部屋で手早く丁寧に赤ん坊を拭いたあと、保湿する。乾

乾燥した空気とどんどん乾いていく自分の肌を感じると、とりわけ丁寧に手早く赤ん坊の薄く乾燥しやすい肌にベビーローションを塗る。おむつを当て、肌着とパジャマを着せ、ベビー毛布を掛けていると、赤ん坊がばぶばぶと口をパクパクさせている。それを見て自分自身ものどが渇いているのだと初めて気づき、大急ぎで自分の顔に化粧水だけ振りまいたあと、水を飲みながら赤ん坊に授乳する。

自分の寒さや乾燥、渇きは赤ん坊の状態を感じるセンサーであり、赤ん坊を感じ取るための背景、地であった。「私」は消えてしまうわけではない。「何もかも忘れて眠りたい」と思っている「私」、「永遠にこの子をすっぽり抱っこしていたい」と微かに望んでしまう「私」がぼんやりとあったことは覚えている。その「私」は消えてなくなっていたわけではないが、ただそれは育児の大部分の時間、赤ん坊の背景であり、ときには私自身にさえ気づかれないくらいに後退し、私にとってほとんど意味のないものになってしまっていた。

こうして、社会的所作言語を持たない乳児の育児の「大変さ」を考察すると、乳児の背景に後退している母親、自分にとってははっきりとは現れない母親の在り方が見えてくる。こうした在り方は「母親という役割」に必然的な要素であるとは考えられないが、長時間一人で育児している場合にはこの役割の独特の要素になっているとも考えられるだろう。

### 3. 駆り立てられるということ

乳児をケアすることは乳児を感じようとすることに始まるのであった。ここではそもそもそのケアの動機に着目し、動機とその引き受け方について考えてみよう。全的なケアを要する乳児の「無力さ」はときに育児するものに対し強力な働きかけとして機能する。極めて弱弱しいこの「無力さ」は、育児し、育児の責任があるものにとっては「私によって守られることを必要としているもの」「ケアせずにはいられないもの」として現れることがある。否応もない私への呼びかけ、いわば私を駆り立てる力として現れるのである。赤ん坊は極めて非力で無力であるが、人をひきつけ、駆り立て、振り回す。それは乳児に備わった力である。

たとえば、泣いている乳児への対応を考えてみよう。乳児の泣き声に反応し、思わず身がかがめて「どうした？」と赤ん坊の顔を覗き込みつらそうな泣き声に、何とかしてあげずにはいられず、無我夢中で、駆り立てられて応じる場合がある。そのように自分自身を顧みずに乳児の声や状況に全力で投入してしまうことがある一方、当然ながら「しかたないな」と応じたり、あるいは「今はちょっとごめんね」と自分の段取りを優先させる場合もある。こうした二種の接し方を考えたとき、非常に興味深い概念と対になっていることがわかる。

メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』を「自由」という章で締めくくっている。川崎はこの自由論を分析し、「英雄の自由」と「逃走の自由」という二つの自由の概念を明確にしてその連関と相互性を検証している（川崎 2016）。それぞれの自由の概念を追ってみよう。

「英雄の自由」と呼ばれる自由は、状況や関係、任務などを「呼びかけ」として引き受け、

その呼びかけに自分を投じていく自由である。それは段取りや願望や意図からの完全な解放であり、いわば「私」自身からの自由である。メルロ＝ポンティはこの概念を示すものとして、サン＝テグジュペリ『戦う操縦士』からの文章を引用している。それは、炎に包まれたわが子を、自分を身代わりにしてでも助け出そうとする親の在り方の記述である。あるいは、中真生(2021)はその著作において「第一の親」(子どもとも緊密な関係にある保育者)について次のように記述している。「子どもが自分のことを、あなたじゃなきゃだめ、あなたがいないと安心できないと必死に求めること、このように子どもに「第一の親」に選ばれ、指名されることが、最終的にはその「指名」された親に、どんなコストを払ってでも、「第一の責任」を引き受けさせる重要な動機付けになっているのではないだろうか。…(略)そのような、自分しかいないという使命感が、その人を「第一の親」にするという側面がある。そしてそれは、つねに母親であるわけでも、生みの親であるわけでもない」(中 2021: 206-207)。文脈からして、子がこのように発話しているわけではない。おそらく、「私」が赤ん坊の泣き声に、ほかならぬ私自身への呼び声、叫びを聞き取っているのである。中のこの記述には子の声を自分への「呼びかけ」として引き受け、そこに自分を投じていく親の在り方が描出されている。無我夢中になって呼びかけに応じ、われとわが身を投じていくこの自由は、突き詰めれば、一つの関係や責任、役割に全身全霊を投じる「英雄の自己犠牲」である。自己犠牲的な形をとるこの自由は、「駆り立てられ」「そうせずにはいられない」場合の育児の在り方と極めて類似していることがわかるだろう。

役割や関係に自己自身を投じていくこの自由には、責任の全うとでもいうべきある種の充実感が伴う。「忘我」「や「無我夢中」と言うにふさわしい恍惚感を得る場合もある。しかし注意しなければならないのは、この充足感や恍惚感が自己自身によって発動できるのではなく、「やりがい」とも呼ばれうるような、強制的や役割付与や労働の搾取の口実として機能しかねない点である。また「駆り立てられ」「せずにはいられない」という育児のこうした側面はいわゆる「母性幻想」に寄与してしまっていることも指摘できる。つまり、母親と呼ばれる役割に投影される「無私の愛」とか「無限の慈しみ」といった幻や神話の構成要素となりうるのである(江原 1991)。

もう一つの「逃走の自由」についての分析を追ってみよう。「逃走の自由」は、状況から距離をとる能力、あるいは別の状況に身を置く自由である。それは人間が、どんな「状況」や「役割」「関係」にも、どうしても回収しきれない「私」であることを保証する自由である。「私」は多くの役割や属性、様々な人とのかかわり、社会的状況や立場によって成り立っている。しかし「逃走の自由」は、私がただ一つの状況やただ一つの役割には還元されえないものであることを保証する自由である。私は今日の日本という極めて限定的な状況を生き、そこに含まれ、そうした状況が極めて限定的であることすら忘れていたこともある。しかしだからといって私は「今日の日本」といったものに吸収されてしまっているわけではない。そうでないからこそ「今の社会の在り方は改善されてしかるべきであろう」と社会状況から距離をとって考えることができるし、どうにも苦手なある役割について「放り出すわ

けにもいかないし、かといって今のままではつらいので、取り組み方を変えてみよう」など、やみくもに消耗することなく別のこなし方を模索できたりするのである。「逃走の自由」は「別のやり方」や「別の関係」を可能にしている自由であり、言うなれば、様々な関係や社会的役割、肩書などをすべて引いていって最後にどうしても残る「私」を約束している。

先に見た「英雄の自由」が世界に身を投じ、究極的にはある関係に完全に自分を捧げていく自由であるのに対し、「逃走の自由」は世界から距離をとろうとする自由であって、この二つは正反対の方向を帯びている。しかし、「私」や「個」「我」を担保する逃走の自由がなくては、「我を忘れ」「無我夢中」になって駆り立てられる「英雄の自由」も不可能であることに注意しなければならない。「私」や「個」が担保されてなければ、役割や責任における自己犠牲や献身は「個の喪失」である。つまりそれは、役割に回収しきれない「私」が「このままでいいのか」と自問したり、ときに「私」自身を楽しみ、苦しんだり、葛藤したりすることのなくなった、役割や任務への埋没である<sup>6</sup>。それは、無我夢中で身を投げ出す「英雄の自由」とは全く異なる、自由の喪失である。「英雄の自由」が、程度の差はあれ平常では得難い喜びや恍惚感を与えること、「英雄の自由」は条件や役割によって約束されたものではなく、ましてや強いられて発揮されるわけでもないことを考えると、現状の歪みが浮かび上がる。「逃走の自由」と「英雄の自由」のいかなるものであるかよりわかりやすく考えるために、ここである歌詞の一部を挙げたい。2018年に発表された「あたしおかあさんだから」という歌で、作詞は絵本作家ののぶみ氏である。発表された当初、賛否両論が起り、とりわけ「呪いの歌」と強く批判された。

一人暮らししてたの おかあさんになるまえ ヒールはいて ネイルして  
立派に働けるって 強がってた  
今は爪きるわ 子供と遊ぶため 走れる服着るの パートいくから  
あたし おかあさんだから  
あたし おかあさんだから 眠いまま朝5時に起きるの  
あたし おかあさんだから 好きなおかずあげるの  
あたし おかあさんだから 新幹線の名前覚えるの  
あたし おかあさんだから あたしよりあなたの事ばかり<sup>7</sup>

これは歌詞の冒頭の一部である。この歌が「呪いの歌」とも言われてしまうのは、「逃走の自由」が示されないまま「おかあさんという役割」が課されているからだろう。さらにその「おかあさんという役割」に自己犠牲が必然として課されてしまっている点が、「逃走の

<sup>6</sup> 酒井は他者がどのように私に現れるのかを論じるなかで、「役割」や「任務」などを通じて「他者の個」が知覚されることを示しているが、一方他者が役割や任務に埋没してしまつて「個」として知覚されえないケースもあることを指摘している（酒井2019）。

<sup>7</sup> <https://utaten.com/lyric/iz18020518/> 最終確認日 2022年4月14日

自由」の欠如、「私」の役割への埋没を一層つよく引き立たせている。しかし「呪いの歌」と批判されたその一方で、この歌詞について「そうでも思っていないとやっていられない」と多くの擁護の声があがったのも、特筆すべきであろう。「こういうものなのだ」と自ら言い聞かせないと「おかあさん」という役割をこなせない。「そう思わなくては」「こういうものなのだ」と自ら言い聞かせなければならないような、むりやりに内在化させようとしなくてはならないようなものが「おかあさん」の役割に課されてしまっており、それが「呪い」とも呼ばれてしまっているのである。

ここで私たちは乳児の育児の「大変さ」になりうるものを新たに導入することができる。それは、弱弱しく、傷つきやすいものに否応もなく駆り立てられ、身を投じる充実感と消耗である。その一方で、「お母さん」という役割に強烈に期待されている「自己犠牲」や幻想が、「逃走の自由」も「英雄の自由」も不可能にする、役割への埋没や「個」の消失を促しているという「大変さ」も浮かび上がるだろう。すなわち、そこに吸収されまいと葛藤する消耗、その「大変さ」である<sup>8</sup>。

#### 4. 今一度、育児の大変さとは

振り返ってみよう。私たちは、「乳児の無力さが母親という役割においてどのように経験されうるか」という出発点から、何かはっきりとした言葉にされていない、あるいは「忘れてしまった」と言われる「育児の大変さ」の一端を垣間見た。

「社会的リズム」と「乳児のリズム」の両立の大変さのもとに見えてきたのは、段取りや目的達成のプロセスの弱体化であった。それは豊かさにもなりうる一方で、先の見えなさ、過去との結びつきの困難さによって、終わらない「今」に閉ざされてしまうことでもあるのを確認した。また次に私たちは、感覚を駆使して乳児を感じる「大変さ」のもとに、ぼんやりとした乳児の「背景」へと後退してしまう「私」という在り方を見た。そして最後に、乳児の育児には、否応もなくあるいは恍惚なのかで乳児の呼びかけに身を投じていく「大変さ」があることを見た。その一方で乳児を後回しにする場合も当然多々あるのだが、一般的な通念は「母親という役割」には必然的に「私」を投じていく「自己犠牲」が課されてしまっているということ、課されてしまっている「私」の犠牲は「私」のすべてを役割に埋没させ、「私」を不可能にしてしまうようなリスクを孕んでいることを確認した。ここで見たすべての「大変さ」の中に、「母親という役割」にのまれかねない「私」、消え入りゆくような「私」が確認された。しかしどんな役割にも吸収されない「私」が残る場合、あるいはそれを残そうとする場合、そこに、消えまいと葛藤する「私」、飲まれまいと葛藤する「私」が残ることがわかるだろう。究極的には、放棄するか、葛藤においてのみ残される「私」のあり方に、

---

<sup>8</sup> 先に挙げたホックシールドは、「感情労働」に従事する労働者に圧倒的に女性が多い事実を踏まえながら、社会全体が「女性」に「お母さんの役割」を要請していることを指摘する（ホックシールド 2000）。

その「大変さ」が浮かび上がる。

冒頭で示したように、乳児の育児の「大変さ」は言葉にされ難く、また忘却されやすい。それは母親という役割において「私」の行動の能力が弱体化され、乳児のリズムに振り回され、過去と未来とのつながりとしての「私」が希薄になっているためかもしれないし、言葉や規範的所作から離れ、記録や記憶のすべを失っていたためかもしれない。また一人で赤ん坊の命を守り、育むことが文字通り「私」を投げ出していくことだからなのかもしれない。いずれにせよ、現状、乳児の育児の経験は「大変」という言葉を漠然とあてがわれた、見ないものになってしまっている。「母親という役割」のもと、何が経験されるのか、見えるようにしていかなければならない。そうしなければ、そこにどんなニーズがあるのか、他者によってどう介入できるのかも見えてこず、「乳児の育児の大変さ」は社会の枠外に取り残される問題になってしまうのである。また見えないぶん、「母親の役割」の内実は経験の断片から「神話」や「幻想」のように作り上げられ、祭り上げられていってしまう。そこにあるのは「大変」という訴え自体が、「すごいね」「そういうものなんだね」と無効化されているのである。「母親という役割」のもと、何が起きているのか、私たちはなお言語化していかなければならないだろう。

## 文献

- 江原由美子、1991、「リブの主張と母親観」、グループ「母性」解説講座編『「母性」を解説する』、有斐閣選書。
- 川崎唯史、2016、「英雄と逃走 メルロ＝ポンティにおける二つの自由」、メルロ＝ポンティ・サークル編、『メルロ＝ポンティ研究 第20号』。
- 酒井麻依子、2019、『メルロ＝ポンティ 現れる他者/消える他者』晃洋書房。
- チョドロウ、ナンシー（1981）『母親業の再生産—性差別の心理・社会的基盤』新曜社。
- 中真生、2021、『生殖する人間の哲学』勁草書房。
- 中村佑子、2020、『マザリング 現代の母なる場所』集英社。
- 早川正祐、2021、「自己実現の自由と不自由——相互性をもたらす現在享受的な自己実現」『哲学』72：21 - 35。
- ホックシールド、アリー、2000、『管理される心—感情が商品になるとき』世界思想社。
- メルロ＝ポンティ、モーリス、1974、『知覚の現象学 I II』みすず書房。

(みやはら ゆう・立命館大学)